季節の話

森朋也（山口大学教育学部）

うっすらと寒さを感じる秋の季節がやってきた。

私が住んでる瑠璃光寺周辺も紅葉で観光客が賑わっている。

瑠璃光寺の賑わいから少し外れた一の坂川。その川沿いは私の散歩コースである。春は満開の桜で華やぎ、初夏は蛍で賑わう一の坂川も、秋が深まれば樹々の葉は散ってさっぱりと野晒になり、閑散としている。



日常の一の坂川をてくてく歩いていると、木々の枝には無数の蜘蛛の巣があることに気がつく。葉がなくなって新築したのか、葉が落ちて元々あった巣が露わになっただけなのか。散り切って風通しの良くなったことでエサは獲りやすくなったのか、あるいは蜘蛛の思惑がバレバレになって獲りにくくなったのか。

いずれにせよ、私は一の坂川の「ひとつの季節」をそこにみた。そんな日常になぜか私の心は穏やかになる。

さて、蜘蛛は何を思う。

＊＊＊

津和野も紅葉シーズンで一段と観光客で賑わっている。紅葉が散れば、津和野の観光も初詣を除けば閑散期に入る。

小京都の町並みの景観を楽しむ観光客。遊泳する鯉に餌を放る観光客。いや、景観や鯉が観光客を魅了してその視線を奪っているのかもしれない。

鯉が観光客を心を動かす。観光客が放る餌は津和野の鯉にとっての主食である。繁忙期には贅沢を楽しんだ鯉も閑散期は耐え忍ぶ時期である。鯉にとっては、秋は一年の食い納めの時期。鯉も必死なのかもしれない。

さて、鯉は何を思う。

＊＊＊

ここしばらく、観光の「季節変動性」について調べてる。どの観光地にも繁忙期と閑散期がある。季節ごとの需要の浮き沈みは観光地の一つの個性でもある。北海道や沖縄のような浮き沈みがはっきりしている地域もあれば、東京や大阪のような波がなだらかな場所もある。

一般的に、観光の「おもてなし」は作りおきできない。在庫を積めないので、観光産業は需要の変動をもろにうける。とりわけ、宿泊業は生産設備が固定的で柔軟な対応がしづらい。変動の大きさは一種のリスクなので、変動が大きいと短期的な雇用に頼りがちで、また設備投資の誘因も抑制されるといわれる。結果として、生産性が向上しづらいのだ。

この意味で需要を平準化することは観光産業の成長にもつながる。観光客で溢れてオーバーな地域から、アンダーな地域へ。沸騰する季節から冷め込んだ季節へ。需要の山と谷を均すことに皆が躍起になっている。私もまたそれを考えている。

まだ観られていない、未開な魅力を掘り出して、綺麗に仕立てて商品として売り出す。地域ごとの過剰と過少を、季節ごとの山と谷を均して、どこもかしこも、いつの季節もほどよくホットに賑やかに。みんなで揃って健やかに成長を ―― はい、よろこんで、あなた方のため。

さて、経済人は何を思う。

＊＊＊

一の坂川の閑散さはまだ見出されていない「寂しげな市場の余白」かもしれない。でも、その閑散さは私に一つの季節を気づかせてくれた。むき出しの木々、静まった歩道、推しもなければ映えもない。ただ、蜘蛛の一つの生をそこに観る。Naked な暮らしを。私の暮らしは、今、どの季節なのだろう。

さて、私は何を思う。